

第II部

地域研究の牽引者たちからの メッセージ

地域研究では研究者と対象地域の関係が常に問われるため、地域研究を語るときには対象への「思い」に触れないわけにはいかない。地域研究の牽引者たちが次世代の地域研究者に伝えたい地域や地域研究への「思い」を語る。

現代的状況に発言する

遅野井茂雄（おそのい・しげお）

筑波大学人文社会系・教授、人文社会科学研究所国際地域研究専攻長



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五二年、長野県
- ② 専門分野・地域……比較政治学・ラテンアメリカ、アンデス地域
- ③ 学歴……東京外国語大学スペイン語学科、筑波大学大学院修士課程地域研究科（地域研究専攻）
- ④ 職歴……政府系研究所勤務（二六歳、一三年間）、その間、ペルー問題研究所（在リマ）客員研究員（二九歳、二年半）、外務事務官（在ペルー日本大使館書記官、三五歳、約四年間）、その後、私立大学講師・助教授（四〇歳、三年間）、私立大学助教授・教授（四三歳、七年間）、筑波大学教授（五〇歳〜現在）、日本ラテンアメリカ学会理事長（五二歳、四年間）、日本学術会議連携会員（地域研究委員会、五四歳〜現在）、大学院国際地域研究専攻長（五五歳〜現在）

メッセージ

地域研究者になること

学部時代は国際関係論を学び、スペイン・フランコ体制の外交政策を卒論でまとめた。亜流ファシズム体制がなぜ第二次大戦後三〇年間に生き延びることができたのか、その巧みな現実主義外交を追跡した。

大学院でラテンアメリカに地域を変更。軍政の全盛期の一九七〇年代、事例研究にベラスコ軍政をとりあげたことが縁でペルーにかかわる。戦後第一世代の研究者たちの研究会に参加する幸運を得て、地域研究を意識した。

現地主義を重んじる研究機関に職を得て地域研究者としてのアイデンティティを確立。派遣先の研究所ではペルー研究における学際性の重要性をたたき込まれた。大使館時代は、仮説を立て政治情勢を分析する訓練を学んだ。

第1部「現場の悩み三〇問」を読んで

12「ヨーロッパの地域研究は成り立つのか」について、先進国もすべて地域研究の対象で、そこには日本研究も含まれるべきである。日本文化に浸りきった我われも、外国人の日本研究から多くを学ぶことがある。また、質問項目になかったのは、事態の推移や変化を見据える地域研究の予測可能性の視点である。社会構造の変化や状況変化を見極めることで、情勢の予測性は十分可能と考えている。

⑤ 現地滞在経験……ペルー問題研究所客員研究員、在ペルー

日本大使館書記官。民主化後間もないペルーの解放感漂う明るい雰囲気と、しだいに民主主義の危機が深まり、既成政治の崩壊とフジモリ政権の誕生にいたる一九八〇年代を体験した。その後、調査でペルー、ボリビア、エクアドル等に出かける。

⑥ 研究方法……フィールド経験は現地感覚を保つ意味で不可欠。定点観測。面談、参与観察が主。

⑦ 所属学会……日本ラテンアメリカ学会、日本比較政治学会
⑧ 研究上の画期……一九八〇年代後半のペルーの社会経済危機とフジモリ政権の誕生と改革。危機の体験があるか無いかでフジモリ改革の評価は異なる。

⑨ 推薦図書……カール・ポラニー『大転換——市場社会の形成と崩壊』（東洋経済新報社、一九七五年）

地域研究の魅力と可能性

英語に加え現地語の習得、二つ以上の専門性（学際性）、地を這いまわる体力、勘や洞察力など、地域研究には何重苦もの困難さが課せられる。三〇年前の研究環境は、情報収集の困難さ、円安（一ドル＝三〇〇円）、航空賃やコピー代の高さなど、とくに南米研究は厳しかった。

厳しいなかで研究を続けてこられたのは、具体的な人間関係のおかげだろうと思う。今でも現地調査のかなりの部分は人との出会いであり、それを通じた仮説の確認作業といっても過言でない。長年にわたり積み上げられた人との関係という資産のなかに、対象の国や地域をトータルで理解・判断することが求められる地域研究の真髓があるように思われる。そして身の毛がよだつような歴史的瞬間との出会いは、苦勞に対して神様がくれる贈り物だろう。

いうまでもなく日本のような島国には常に外国のことをフォローし続ける研究者が不可欠である。それを怠るようでは、未来はないだろう。今でも地域研究は「日本が国際社会で生きていくための海図」（梅棹忠夫）である。アメリカのアフガンやイラクでの躰きは、地域研究を疎かにしてきたわけではないか。地道な基礎研究に立って、その時々々の政権におもねることなく、現代的状況に対し発言することを使命とする地域研究者の役割は大きい。

「場」の多様性を深く考える

油井大三郎（ゆい・だいざぶろう）

東京女子大学現代教養学部国際社会学科

地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九四五年、東京都
- ② 専門分野・地域……米国研究
- ③ 学歴……東京大学教養学部教養学科国際関係論分科、同大学院社会学研究科国際関係論専門課程修士課程修了、同博士課程単位取得中退、一橋大学大学院社会学研究科博士号取得
- ④ 職歴……明治大学専任講師（二八歳、五年間）、同助教（三三歳、一年間）、一橋大学助教（三四歳、八年間）、同教授（四二歳、九年間）、東京大学教授（五〇歳、一〇年間）、東京女子大学（六〇歳、五年間）
- ⑤ 現地滞在経験……米国（三九歳、二年間、客員研究員）、米国（四九歳、半年、客員研究員）
- ⑥ 研究手法……米国西海岸、とくにサンフランシスコ湾岸

歴史学の方法を中心に考え、自分の専門分野は現代国際関係史であると考えていたと思う。一九八〇年代半ばに米国に二年間在外研究で滞在し、日本の占領改革の研究をした折、文化の違いを痛感し、国民文化や記憶形成の差に関心をもち始めた。さらに一九九〇年代半ばにはサンフランシスコ湾岸地域のアジア系移民史を研究し始め、小地域のフィールドワークの面白さを痛感した。また、二〇〇五年に日本学術会議に新設された地域研究委員会に関わるなかで、エリア・スタディーズと地理学、人類学との統合などを考えるようになり、空間科学としての地域研究の意味を考え始めている。

地域研究の方法論をめぐる若い研究者の座談会を拝見し、研究者としてのアイデンティティの模索が新しい研究創造の原点となるので、その悩みは建設的なのと感した。ただし、「地域研究とは何か」という問いは堂どうめぐりをしている感がある。それは、地域研究者は対象地域が「好き」だから研究している面があり、その対象地域の「個性的理解」に満足している面が強いと感じる。他の諸科学の場合は、いろいろな時代の人類が直面していた諸課題の解決に肉薄する形で学問形成をしてきた。たとえば、政治学は絶対王政を打倒して市民社会を建設することに貢献したように。ところが、学問が制度化し、学部や学科としての存在意義を主張するようになると、方法自体の独自性を強調して生き残りを図る傾向になると思う。「地域研究とは何か」という議論も同様の傾

地域、アジア系移民史と地域史の交錯を文書資料だけでなく、オーラル資料、地理情報からも研究

- ⑦ 所属学会……アメリカ学会、アメリカ史学会、国際政治学会、歴史学研究会、同時代史学会、移民学会
- ⑧ 研究上の画期……ベトナム戦争、米国を研究する原点
- ⑨ 推薦図書……江口朴郎『帝国主義と民族』（東京大学出版会、一九五四年）、斉藤真『アメリカとは何か』（平凡社、一九九五年）

メッセージ

学部学生時代に所属していた学科が国際関係論と地域研究を一体化した性格の学科であったため、よく「国際関係論とは何か、地域研究とは何か」を議論してきた。ただ指導教員の専門領域が現代史研究であった影響で、どちらかというと

向にある印象が強い。つまり、大学人としての「職業病的発想」から脱却して、地球環境の危機とか、地域紛争の多発とか、グローバル化による格差社会の拡大とか、今の人類が直面している困難に地域研究がどう役立つのかを考える方がかえって独自性が明確になる早道ではないだろうか。

地域研究の魅力の第一は、「他者の深い理解を通じて自己の相対化」を図れることにあると思う。その際、設定する他者が国家単位であったり、国家より広領域であったり、村落などの小領域だったりするが、それを同じ「地域」として一体化する前に「地域」設定の差の意味をもっと深めるべきと考える。地域研究は、政治学や経済学などと異なり、「場」にこだわる学であるのだから、「場」の多様性を学問的に深く考えるべきと思う。第二に、「場」に関連して、地域研究は文理融合ないし文理協働的に発展する可能性のある分野としての魅力があると考え。「場」を考えるときに、地形・地質・緯度・経度・気候などの自然条件は無視できない。近代の学問が文理分離し、文系の学問もディシプリンごとに壁を作ってきたなかで、現在の世界が抱える諸困難はこの「壁」を打破して、再統合しなければ解決がつかない状況にあることをまず認識すべきと思う。地域研究は、「個別性」に甘んじず、現代世界の諸課題に果敢に挑戦してゆけば、結果的に新たな「普遍性」を獲得できる学問だと信じている。是非、若い地域研究者の方にはそうした知的挑戦に挑んでいただきたい。



体制と社会の隙間を観察する

国分良成（こくぶん・りょうせい）

慶應義塾大学法学部・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五三年、東京都
- ② 専門分野・地域……現代中国論・東アジア国際関係専攻
- ③ 学歴……慶應義塾大学法学部政治学科を卒業後、同大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程・博士課程を修了（法学博士）
- ④ 職歴……一九八一年慶應義塾大学法学部専任講師、八五年助教教授、九二年教授、九九〇七年同大学地域研究センター（〇三年東アジア研究所に改名）所長、〇七〇一年同大学法学部長兼大学院法学研究科委員長。その間、八二〇八四年米国ハーバード大学、ミシガン大学客員研究員、八七〇八八年中国・復旦大学客員研究員、九七〇九八年北京大学、台湾大学客員研究員（短期）。
- ⑤ 現地滞在経験……米国、中国、台湾に客員研究員として滞

在（職歴参照）。

- ⑥ 研究方法……政治学および国際政治学
- ⑦ 所属学会……アジア政経学会（〇五〇七年理事長）、日本国際政治学会（〇六〇八年理事長）
- ⑧ 研究上の画期……一九八七年から八八年までの復旦大学滞
在。表面の固い政治体制の内側でたくましく生きる人々の現実を垣間見た時。その時代、私の研究上の画期ともなる出来事、民主化運動〓天安門事件への雰囲気醸成されていた。
- ⑨ 推薦図書……国分良成・酒井啓子・遠藤貢編『地域から見た国際政治』（有斐閣、二〇〇九年）

メッセージ

高校時代私は卓球の選手で、大学に入る前年（一九七一年）に名古屋で開催された世界卓球選手権でピンポン外交が繰り広げられたことに感動したのを覚えている。大学（政治学科）では発展途上地域研究を志したいと考え、さまざまな講義を聴講し、石川忠雄先生の講義に最も感動してゼミに入った。当時の中国は文化大革命の末期、日本では全共闘時代末期だったが、文革賛美の熱気はまだかなりあり、石川先生はリベラルな立場から文革を権力闘争として批判的に論じていた。卒業論文は百家争鳴運動から反右派闘争への転換過程で、社会主義における自由の問題に関心を持っていた。その原点は映像で見た六八年プラハの春の衝撃にあった。

私は大学院から専任講師の時代、文革へいたる中国共産党の権力構造の分析に専念した。八〇年代初頭中国留学を考えたが、その頃若手の研究者に機会は少なく、私の最初の留学先は米国となった。それが現在にいたる私の研究のスタイルと学術交流の人脈を決めることになった。留学一年目、ハーバードでは現在まで交流の続く多くの研究者と知己を得た。留学二年目、私は当時米国の現代中国研究の頂点ともいべきミシガン大学のマイケル・オクセンバーグ教授の門を叩いた。中国の官僚制に関心を移動させたのは、彼との研究交流の中からであった。

帰国後、ひとつのコンプレックスが私を襲った。中国経験のない英語使いの中途半端な中国研究者、という自身の姿がそれである。私は中国留学の機会を求め続け、八七年から八八年までの一年間、上海の復旦大学によく大学の教員交換留学の機会を得た。最初の何か月かは狂ったように中国語に集中し、習得するほどにコンプレックスが取れていった。社会に溶け込み過ぎて、A型肝炎にも感染してしまった。そのとき私はすでに三〇代半ばの助教教授であった。

地域研究者に現地語と英語、とくに会話は必須である。どちらかが足りなくても後ろめたさが残る。私は政治学者であり、中国でのフィールドワークは難しい。政治権力者や高級知識人との会合は多いが、視点と認識のバランスを図るために、私は一人で勝手に街に出て歩き回り、市井の人々と接し、会話を楽しむ瞬間を今でも続けている。政治体制と現実の隙間を観察するのである。

地域研究は楽しい。しかしそれに埋没してはいけない。何のために地域を研究するのか、学者としての使命、社会人としての使命、日本人としての使命、地球人としての使命、そして人間としての使命を忘れないようにしたい。

地域理解の上で問題分析

高橋五郎（たかはし・ごろう）

愛知大学大学院中国研究科教授、河南財經政法大學（中国）兼職教授

地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九四八年、新潟県
- ② 専門分野・地域……中国地域研究
- ③ 学歴……愛知大学法経学部（経済学専攻）、千葉大学大学院自然科学研究科（生産科学専攻）
- ④ 職歴……農林水産省外郭団体（二四歳、一年間）、研究機関主任研究員（三六歳、九年間、この間に博士課程在籍）、大学教授（四五歳、一八年間）
- ⑤ 現地滞在経験……長期滞在経験なし
- ⑥ 研究方法……フィールド調査は、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ポーランド、タイ、ミャンマー、ベトナム、フィリピン、マレーシア、シンガポール、台湾、オーストラリア、インド、中国など。主なフィールドは中国農村。

- ⑦ 所属学会……国際農業経済学会、中国経済学会（アメリカ）、香港経済学会、中国経済学会（日本）、アジア政経学会（日本）、日本協同組合学会
- ⑧ 研究上の画期……中国の市場経済への転換とソ連崩壊
- ⑨ 推薦図書……宮本常一『忘れられた日本人』（岩波文庫、一九八四年）、加々美光行『中国の新たな発見』（日本評論社、二〇〇八年）、高橋五郎『国際社会調査——中国・旅の調査学』（農林統計協会、二〇〇七年）



メッセージ

私は内外の農業問題に関心があった。そして農村調査がとても好きであった。学部生の頃から、「農村調査」という言葉の響きには、自分が新しい学問の世界に踏み込んでいるのだという実感が湧いたものだ。

その結果、国内では北海道から沖縄まで全国を踏破し、多くの地域の農民を調査し田畑の様子や農作物を観て触ることになった。田畑の土を握り、土の匂いを嗅ぐ習慣はすでに身に付いていた。

これと同じことを中国農村でもやっているし、中国以外の国でもやってきた。私の地域研究は農業問題を比較研究することだから、農村調査は不可欠だ。したがって私にとっての地域研究とは、地域を研究することというより地域で研究するということだ。中国農村の現場に立つと必ず日本の農村の様子が目に浮かぶし、日中の農民の顔の表情のなんと似ていることかと想う。少しだけ翳を持ってはいるが、笑う方は大きく嘘のない顔だ。実は、農民の顔に国境はないのである。イタリアの農民、タイの農民、アメリカの農民、みなよく似た表情だ。私にとって、地域研究の魅力のひとつはこの点に気付いたことだ。

中国で農村調査するときは、かならず自分流の仮説を立てる。調査には仮説探索型と仮説検証型とがあるが、私の場合ほとんどが後者だ。そのために方法論は大事だ。

方法的には中国研究と原論上の農業問題研究を切り離している。中国研究とは中国経済や政治、文化・社会など中国研究者として持つべき中国に関する学問的な一般的常識のことであり、原論上の農業問題研究とは農業問題分析の理論的、技法的方法論のことを指す。前者は特殊中国的研究であり、後者は一般的農業問題研究である。前者は後者の前提であり、そのうえで後者が成り立つ。

したがって私の中国農業問題研究の方法は、「中国の農業」を研究するのではなく、中国に付着して、あるいはそこを舞台に演じられている農業を研究するのである。ここから、農業問題を国や地域間の比較研究として取り組む道筋が自ずと生まれてくる。

原論上の農業問題研究では、分析上の方法として、とくに農産物価格論、地代論、土地資本論、土壌学、水利科学、農業簿記、農地制度論（農地制度史を含む）、地域産業論が重要だと思ふ。院生のときは、とくにこれらに注目して研究した。

大学院に籍を置いている間は、指導教官の思考方法や枠組みを知る努力が非常に重要なことだと思う。地域研究は研究対象国によって方法論が異なる。異なるどころか、国際学界で認知された統一的方法論がないのが地域研究の現状だ。それだけに指導を受けている教官の方法を知ることが、その後の飛躍のためにも大切である。

言語の習得から始まる関係

宮崎恒二（みやざき・こうじ）

東京外国語大学・理事



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五二年、愛媛県
- ② 専門分野・地域……文化人類学、インドネシア、マレーシア
- ③ 学歴……国際基督教大学教養学部社会科学科（人類学専攻）卒業、東京都立大学大学院社会科学科修士課程（社会人類学専攻）修了、ライデン大学社会科学部ドクトラントゥス課程（文化人類学専攻）修了、東京都立大学大学院社会科学科博士課程（社会人類学専攻）単位取得退学、ライデン大学社会科学部博士号（文化人類学専攻）取得
- ④ 職歴……東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助手（一九八四年から五年間）、助教（一九八九年から七年間）、教授（一九九六年から）。この間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長（二〇〇一

年から四年間）、国立大学法人東京外国語大学理事兼副学長（二〇〇五年から、二〇〇九年からは理事）。

- ⑤ 現地滞在経験……インドネシア（二八歳から二年間、研究員）
- ⑥ 研究方法……参与観察、インタビューを用いた現地調査が研究の基本であるが、在地文書も資料として用いる。
- ⑦ 所属学会……日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、日本オセアニア学会、Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde
- ⑧ 研究上の画期……インドネシアの民主化
- ⑨ 推薦図書……ヨセリン・デ・ヨンク他（宮崎恒二編訳）『オランダ構造人類学』（せりか書房、一九八七年）

メッセージ

〔地域〕研究者になること

大学在学中、まず文化人類学に関心を抱き、実際に調査対象を選ぶ段階で、インドネシア研究に取り組むようになった。インドネシアを選んだのは、現地調査が可能であること、日本と同様、水稲耕作を主たる生業としつつも、宗教面で日本と異なるイスラームを奉じていることが、関心を惹いたからである。

地域研究という概念を意識し始めるのは一九八〇年代以降であるが、政治研究が中心であり、対象とする社会の視点やそこでの体験が重視されないと印象を持っていた。

しかし、一九九〇年代以降、文化人類学に限らず、さまざまな分野で、インドネシアなどを対象とする研究者が増え、現地調査も行うようになってきたことから、より広い専門分野をカバーしつつ、対象地域を研究する人々のつながりや共同作業が意味を持つようになってきた。研究者のフォーラムやネットワークとしての地域研究を意識するようになったのは、この頃からである。

地域という概念への注目により、学問分野の重要性が薄れるわけではない。学問分野はどのアスペクトを切り取るか、という視点に関わるものであり、それを欠いては、地域研究は単なる現地に関する知識の集合体に墮してしま

コメント

・「地域」について

議論をある程度制限するための概念であり、柔軟に考える方がよい。

・「欧米」について

既存文献や研究者の層に圧倒され、また欧米人自身が社会を他者の眼にどう映るか、ということにあまり関心を示さないが、フィールドワークによる生活や行動の観察は意外に少ない。ある意味で最後の秘境といえるだろう。

・「フィールドワーク」について

「彼ら」の思考・行動について知ることが重要であり、言語の習得はその一歩である。

・「研究成果の評価」について

研究の評価は、学問分野に基づいてなされるが、大学教育は、学問分野を教え込む方向から、トピック主体に変化しつつある。教育現場では、学問分野、地域、言語能力など、二足、三足のわらじの用意を履ける人材を求めている。

地域研究の魅力と可能性

対象とする地域という「他者」と向きあうのが地域研究であるが、同時に地域研究は異なる学問分野という「他者」と向き合うフォーラムである。

学生寮に国際社会を見る

脇村孝平（わきむら・こうへい）

大阪市立大学大学院経済学研究科・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五四年、兵庫県
- ② 専門分野・地域……社会経済史・南アジア（具体的にはインド）
- ③ 学歴……大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程
- ④ 職歴……現在の所属先のみ（三六歳、現在まで二一年間）
- ⑤ 現地滞在経験……インド（三二歳、二年間、留学生）、イギリス（四三歳、一年間、客員研究員）
- ⑥ 研究方法……文献史的な研究方法を取っているので、上記のインドおよびイギリスに滞在中も、公文書館ないしは図書館に日参することが常だった。
- ⑦ 所属学会……日本南アジア学会、社会経済史学会、アジア政経学会
- ⑧ 研究上の画期……一九九〇年代以降のインドの経済的台

えた。事例研究としてインドを対象地域に選び、一九世紀後半に頻発した飢饉の研究を開始した。これが私にとっての「地域研究」事始めだった。しかし、自らの研究を「地域研究」として意識するようになったのは、一九八〇年代後半の二年間のインド留学という契機であった。留学中、飢饉の研究のためにニューデリーの国立公文書館に通いつめた。さて、現在の私の研究テーマは英領期インドの疾病史・公衆衛生史ということになる。当初の「飢饉」研究から、次第に「疫病」研究に移行した結果である。また、研究のスタイルも少し変化した。狭い意味では、必ずしも「地域研究」的ではなくってきたからである。

第一部「現場の悩み三〇問」を読んで

先に「狭い意味では、必ずしも『地域研究』的ではなくなってきた」と書いたが、以下に敷衍する。一九九〇年代中頃から医学社会史的な領域に関心を持つようになり、同じ志の東アジア（日本、台湾、韓国）の研究者との間に研究者ネットワークを形成するようになった。その結果、東アジア史との比較のなかで南アジア史を考えるようになった。その後、二〇〇〇年代初頭から、いわゆる「グローバル・ヒストリー」という国際的な研究潮流に関心を持つようになった。当初この研究潮流では、中国史が問題関心の中心にあったが、次第に南アジア史も視野の中に入るよう

頭、そしてグローバル化状況への適応。これによって、私のインド史認識が大きく変わった。その後、「開放体系としてのインド亜大陸」というような見方をするようになった。

- ⑨ 推薦図書……萩原延壽『遠い崖——アーネスト・サトウ日記抄』（全一四巻、朝日文庫、二〇〇七〜〇八年）。アーネスト・サトウというイギリスの一外交官が幕末維新期の日本を「地域研究」した記録。

メッセージ

（地域）研究者になること

私の専門は経済学だが、学部時代は開発経済学に関心があった。大学院に進学してから経済史を専攻することを選択し、「低開発」の根拠的理由を歴史のなかに探ろうと考

になり、私自身も南アジア史をグローバルな連関のなかで考えるようになっていった。かかるアプローチもまた「地域研究」の一類型に加えていただければと思う。

地域研究の魅力と可能性

「地域研究」とは何か。私は次のように考える。「外部の人間（exotic）が、ある社会をできる限り内在的に理解する試みではないか」と。これは、一昔前の文化人類学の自己規定に近いかもしれない。かかる認識に基づきついついと、私の「地域研究」の原点は、一九八〇年代後半のインド留学における生活経験ということになる。生活経験とはいつでもデリー大学の学生寮で暮らしたに過ぎないが、インド人学生との交遊、そして学生寮における人間模様の見聞が、私のインド社会像の基礎を形作った。とりわけ、「学生寮という社会がひとつの国際社会であった」という記憶が私の中に深く刻み込まれた。インドのさまざまな地域からやってきた母語を異にする学生たちが、あたかも国際社会のようにしてひとつの世界を形成していたからである。先に、研究上の画期として「一九九〇年代以降のインドの経済的台頭、そしてグローバル化状況への適応」ということをあげたが、グローバル化した世界に対応できる文化的遺伝子（ミーム）がインド社会に深く埋め込まれていることは、この寮生活のなかですでに体験していたのである。

生きるための謎の解明

酒井啓子（さかい・けいこ）

東京外国語大学院総合国際学研究院・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五九年、神奈川県（本籍地）
- ② 専門分野・地域……イラク政治研究
- ③ 学歴……東京大学教養学部国際関係論分科卒
- ④ 職歴……アジア経済研究所研究員（二三歳より二四年）、在イラク日本大使館専門調査員（二七歳、三年間）、カイロ・アメリカン大学客員研究員（三六歳、二年）、東京外国語大学教授（四六歳）
- ⑤ 現地滞在経験……イラク（二七歳から三年間、日本大使館専門調査員）、エジプト（三六歳から二年間、カイロ・アメリカン大学客員研究員）
- ⑥ 研究方法……主として文献研究、政党機関誌などの一次資料分析を行うが、九〇年代の二年間で中東、欧米在住のイラク亡命政治家一〇〇人近くに non-structured

メッセージ

（地域）研究者になること、

および第一部「現場の悩み三〇問」を読んで

自分がいつ「地域研究者」になったのかは、今でもわからない。私が研究を始めた頃は、地域研究が学問分野として社会的認知を得てはいなかったからだ。学卒で、しかも国際関係論を齧っただけで研究所に勤務した者にとって「地域研究者」とは何ぞや」が問題ではなく、むしろ「調査か研究か」が同僚との議論の中心だった。つまり、現地の言葉と土地勘を身に着けてカントリリーリスタや政策提言を行う、「調べる」ことに長けた調査員リサーチャーとなるのか、特定地域に関して「調べたこと」を相対化し、人間が生きる世界全体の謎を少しでもわかりたいと考える研究者スカラとなるのか、という議論である。

その議論は、第一部「現場の悩み三〇問」で交わされた「地域研究か理論研究か」の議論に近いものかもしれない。しかし、三〇年前に比べて違和感を感じるのは、今の議論では研究業を生業にすることが前提とされ、「地域研究か理論研究か」の模索が業種の問題のように見えることである。自分が中東研究を目指したとき、職業としての「研究者」になりたいとは考えていなかった。わからない謎をわかるために、事実を調べたり事実を理解する枠組みを学び続けた結果、今私は「研究者」と呼ばれているだけだ。現地社会

ンタビューやオーラルヒストリー聞きとりを実施。とくに政党事務所などを長時間訪問しての参与観察は政治エリート分析に有効。

⑦ 所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、日本比較政治学会

⑧ 研究上の画期……三年間のイラク滞在とその後の湾岸戦争。外国人研究者が現地社会に入り込むことで、接する人々に「外国の手先」の嫌疑をかけることになるという冷徹な事実、研究者としてどう対応するか、また研究者が戦争を止められないばかりか、戦争を材料に研究上の名声を得る「死の商人」であるという現実に向き合うかという深刻な課題を以降背負い続けることになる。

⑨ 推薦図書……酒井啓子『イラクは食べる——革命と日常の風景』（岩波新書、二〇〇八年）

をよくしたいと働く政治家や実務家になれるほど、知りえたことを簡単に政策や実務に反映できる能力もなかったし。

そしてある地域のある現象に触れて抱いた謎を追い続けた結果、インターデイシプリナリーにならざるをえなかった者が、「地域研究者」なのではないか。ある地域を研究対象とするのは、そこで触れた社会の在り方、人の結ばれ方のなかに、自分が人間として抱えてきた人生の謎を垣間見たからではないかと思っている。私にとってその謎は「人はいつ、なぜ他者と共感し、なぜ他者を排除するのか」であり、その問題を最も激しくアンプリファイして提供してくれたのが、中東の諸社会だった。

だから私にとっての地域研究は、どこか高みから見下ろす他者研究ではなく、ただ自分が生きていくための謎解明の作業である。

地域研究の魅力と可能性

英国のバンド The The の楽曲に、If you cannot change the world, change yourself と何度も繰り返した最後は、And if you cannot change yourself then...change the world と歌う歌詞がある。どんな既存のデイシプリンも欧米中心視点もグローバル化も自分の抱えた謎を解けないとき、そしてその解の片鱗が世界の辺境のどこかにあると発見したとき、そこから世界を換骨奪胎するのが地域研究なのだ。

常に問われる立ち位置

白杵 陽（うすき・あきら）

日本女子大学文学部史学科・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五六年、大分県
- ② 専門分野・地域……パレスチナ／イスラエル、ヨルダン、レバノン
- ③ 学歴……東京外国語大学外国語学部（アラビア語）、東京大学大学院総合文化研究科（国際関係論）、京都大学博士（地域研究）
- ④ 職歴……在ヨルダン日本大使館専門調査員（二八歳、二年半）、大学講師・助教授（三二歳、七年間）、エルサレムの大学研究機関研究員（三四歳、二年間）、大学共同利用機関助教授、教授（三九歳、九一年半）、大学教授（四九歳、六年間）
- ⑤ 現地滞在経験……ヨルダン（専門調査員、二年半）、イスラエル（研究員、二年間）、レバノン（研究員、半年間）

メッセージ

私はもともとパレスチナ委任統治期のアラブ現代史研究から出発したが、地域研究を強く意識し始めたのは初めて就職した佐賀大学で「アジア社会論」という講義を受け持った時からであった。社会学教室に属して同僚は社会学と文化人類学が専門だった。だからこそ研究者として自分のアイデンティティは何なのかを考えざるをえなくなった。それまで専門は歴史学＋国際政治学（アラブ現代史）だとナイーブに答えていた。ところが、同僚には歴史学も政治学も担当教員がいるのである。苦肉の策ではあったが、一九八五年に設立されたばかりの日本中東学会にすでに入会していたので、以来、積極的に「中東地域研究者」と名乗るようになった。「アジア社会論」の講義でも地域研究を前面に出し、地域としてのアジアあるいは中東をどのように見るべきなのか、方法としてのパレスチナは可能なのかといった、学生に「地域」に生きる意味を問うような講義を行うようになったのである。

佐賀大学在職中に国際文化会館の新渡戸フェローとしてエルサレムに二年間、留学する機会を得た。それまではアラビア語を使ってパレスチナ研究を行っていたが、ヘブライ語のイスラエル研究にも足を踏み入れたのである。世間では「敵対」関係にあるとみなされている人々が住んでいる同一の地域をどのように呼ぶべきなのかという問題が新

⑥ 研究方法……主にインタビューと参与観察

⑦ 所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、日本イスラム協会、史学会、歴史学研究会など

⑧ 研究上の画期……一九九一年一月に勃発した湾岸戦争時、乳幼児二人の子供を含めて家族と共にエジプトに一ヶ月半避難することになり、戦争のためとはいえエルサレムという現地研究の最前線から離れることの意味を考えさせられた。九・一一事件では護教論的な議論の是非を含む「イスラーム」の語り方を問い直すきっかけになった。

⑨ 推薦図書……板垣雄三『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』（岩波書店、一九九二年）は、問題提起的な「地域」論を含み、地域とは何かを考える立場性を絶えず問う必読の論集である。

たに浮上した。アラブ人やユダヤ人の友人・知人の顔を一人ひとり思い起こしつつ、ずっと悩み続けたが、結論として「パレスチナ／イスラエル」と表記することにした。というのも、イギリスによる委任統治期パレスチナの歴史的事実を踏まえ、その領域には現在、イスラエル国家とパレスチナ自治政府の並立という政治的現実が存在するからである。この呼称は一九九三年のオスロ合意以降、日本でも人口に膾炙するようになったが、やはり同一地域を違う名称で呼ぶ紛争地域に関して、双方の側から内在的に研究することの意味を問い直さざるを得なかった。生半可なレベルでの「中立」的立場などを許す研究対象ではないので地域研究者として方法論に関しては現地の人びとを通して常に問い直し続けることになった。

ユダヤ人にしろ、パレスチナ人にしろ、ディアスポラの民である。そのような人々の抱え込む諸問題と向き合うときには研究対象地域はたえず越境をともなうという現実がある。研究者としての立ち位置も問われる。そんな経験を経て、今は日本と中東イスラーム地域との関係を歴史的に問い直す作業を行っている。また講義では学生に、日本という（場）において中東やイスラームを学ぶ意味は何なのかを常に自らに問い直し、地域に生きる個々人の具体的な姿を通して認識する姿勢を持ち続けることが肝要だと強調している。

対話と恋愛のすすめ

峯 陽一（みね・よういち）

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究所・教授

地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九六一年、熊本県
- ② 専門分野・地域……開発経済学、人間の安全保障、南アフリカと南部アフリカ諸国
- ③ 学歴……京都大学文学部（史学科）、京都大学大学院経済学研究科（世界経済論）
- ④ 職歴……中部大学国際関係学部講師、助教授、教授（三二歳、一三年間、現地滞在による休職期間を含む）、ステレンボッシュ大学政治学科准教授（三六歳、三年間）、大阪大学人間科学研究科准教授（四四歳、四年間）。
- ⑤ 現地滞在経験……南アフリカに三年（上記、ステレンボッシュ大学教員として）。たとえ数日の滞在でも、年一度は南アフリカに通うようにしている。
- ⑥ 研究方法……素人なりに参与観察やインタビューを繰り返しているが、それを記録して論文を書くことはしていない。論文に使う一次資料は公文書、政策文書、統計など。予算があれば質問票調査。小説などの翻訳が好き。
- ⑦ 所属学会……日本アフリカ学会。人間の安全保障学会。日本平和学会。国際開発学会。
- ⑧ 研究上の画期……一九九四年。ルワンダの虐殺と、南アフリカでのマンデラ政権の成立。当時は南アフリカも内戦前夜だった。よく避けられたものだと思う。
- ⑨ 推薦図書……内田義彦『作品としての社会科学』（岩波書店、一九九二年）



メッセージ

「神とは何か」というのは問い自体が間違っているのであって、むしろ「人が『神とは何か』と問うのは何故か』を問わなければならない、という議論があった。まあそこかもしれないが、人々は一般的な文脈からではなく、それぞれの切実さがあったそれぞれの神を問うわけなので、問うことが誤りだといわれても困る。

地域研究にも似たところがあると思う。東アジアとは何か、東南アジアとは何か、アフリカとは何か、メコン・デルタをくぐるものは何か、スワヒリ世界をくぐるものは何か。既成の国民国家の枠を壊し、研究者がこのような問いを発し続けてきたことで、地域研究は実質的に進展してきた。

しかし、「地域研究とは何か」という問いは、一般的すぎるかもしれない。それはイスラム教、キリスト教、仏教、アニミズムなどの枠を超えて、人間にとって宗教とは何か、霊性とは何か、祈りとは何か、と問うているようなものだからだ。比較宗教学者が必要であるように、このような大きな問いを発する者もいないと困るのだが、誰でもやれるものではあるまい。

それより重要なのは、対話だろう。別のフィールドをもつ者と対話する。別のフィールドに行ってみる。そうやって自分の固有の問いが研ぎ澄まされ、必要に応じて問いの

フレームも大きくなっていくに違いない。私の拠点は南アフリカだが、アパルトヘイト時代は入国できなかったの、周辺国（まずはナミビア）から南アフリカを見ていた。隣から見ると、大南アフリカの抑圧的なパワーが身にしみる。今やっているのは南アフリカと隣国ジンバブエの政治制度の比較だが、ジンバブエをフィールドとする人たちと議論できるのが面白い。まあ、口だけなら何とでもいえるので、他の地域に関することでも文章を書いて読んでもらうのがいいだろう。

私自身は、高校時代は哲学を志し、学部では歴史学を学び、大学院では経済学を修め、教員になってからは国際関係学、政治学、社会学の教室に籍を置いてきた。ひたすら無節操な文系放浪生活である（妻には貞節ですが）。しかし、「どこにいても僕は地域研究者だから」と開き直ってしまふのは逃げていく気がして、自分が所属している教室の方法論をできるだけ身につけるように、不器用ながら努力してきたつもりである。そのうちに五〇代になって、さまざま学問分野の癖や共通する壁が、それなりにわかってきた気がしている。若手の地域研究者の皆さん、地域研究者としてのアイデンティティを大切にしながら、特定の学問分野と本気で恋愛してみてください。

新しい専門知の創出を

島田周平（しまだ・しゅうへい）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九四八年、富山県
- ② 専門分野・地域……アフリカ農村社会のポリテイカル・エコロジー ナイジェリア、ザンビア
- ③ 学歴……東北大学理学部（人文地理学専攻）
- ④ 職歴……研究所研究員（二二歳、一三年間）、大学助教授（三三歳、五年間）、大学教授（四〇歳、一三年間）
- ⑤ 現地滞在経験……ナイジェリア（二八歳、二年間弱、客員研究員）、ナイジェリア・ジンバブウェ、ザンビア（三七歳、八カ月、国際交流基金派遣計画）、その他一〜二カ月の短期調査多数
- ⑥ 研究方法……ナイジェリアとザンビアで、定量的調査と聞き取り調査を併用した農村調査を実施。現地の古文書館での調査も行っている。

メッセージ

① 研究者になったキッカケ
研究所の地域研究部に入ったのが私にとっての地域研究の始まりである。その研究所を知ったのは大野盛雄編著『アジアの農村』（一九六九）を通してであった。大学の学部時代に読んでいたフェーブルの『大地と人類の進化』（一九七一）、飯塚浩二の諸著作や和辻哲郎の風土論も私を地域研究に誘う下地を作っていたと思う。さらにその源をたどれば、生まれ育った富山県の地理教育にたどり着くかもしれない。キッカケの根は深い。

② 第一部「現場の悩み三〇問」を読んで
地域研究をめぐる質疑では、研究関係の話、教育関係の話、社会的存在意義や就職関係の話など、幅広い議論がなされているが、ここでは研究と教育関係についてのみ私見を述べる。

地域研究者は、地域研究が③で述べるような可能性を秘めているとどこかで感じている。そのため、時に疎外感を抱きつつも意外に意気軒昂として研究に励むことができる。しかし問題は、どのようなキャリアパスでその研究者になり得るのかという点である。地域研究をめざす若手研究者は、時に賞賛を受けつつも現実には厳しい就職問題に直面している。

- ⑦ 所属学会……日本地理学会、日本アフリカ学会、人文地理学会、国際開発学会、環境社会学会
- ⑧ 研究上の画期……ビアフラ内戦（一九六七〜七〇年）。独立後に起きた分離独立戦争としては最も本格的で悲惨な結末を迎えた戦争であった。難民問題、飢餓問題、白人傭兵問題等日本でも広く取りあげられ、支援活動も行われた。この内戦の結末は、アフリカにおける国境線の見直しの難しさを改めて認識させるものとなった。
- ⑨ 推薦図書……Berry, Sara (1993) *No condition is permanent: The social dynamics of agrarian change in Sub-Saharan Africa*. The University of Wisconsin Press, Madison. フラア生産農民研究の第一人者が到達した、アフリカ農民・農村社会論を論じた本で、地域研究が専門科学に発信できるひとつの模範例を示した良書といえる。

「特定の地域を見ることを通して世界を考える」ことの必要性については社会的認知度が高まってきている。しかし、「地域的多様性の中からある法則性を抽出し、あわよくばパラダイムの転換や新しい専門知の創出をねらう」という③で述べるような基礎研究レベルでの大きな可能性についてはあまり認知されていないと思う。そのことが就職先が拡大しない一因かもしれない。

③ 地域研究の魅力と可能性

地域研究の醍醐味についてはすでに拙著『現代アフリカ農村』（二〇〇七）で述べた。ここでは専門分野の学問との比較優位といった点のみを強調していた。しかしそれよりも大事な点は、地域研究がまったく学問分野の枠外に新たな専門知を生む可能性を持っているという点であると考ええる。さまざまな専門分野の研究者がフィールド調査に出かけることも多くなり、現地で調査することは地域研究者の専売特許とはもはやいえない。地域研究は既存の学問の枠内で取り込むことが可能で、かつそれで十分という認識が広まる可能性がある。しかし、多分野の専門家が共同で行う海外共同研究などで現地調査のファシリテーターの役割を果たす以上に、地域研究者は新しい専門知を創出しようという大きな野望を持っていることを、時には積極的に発信する必要があるのではなからうか。

作法を身につけ、心を込めて

森井裕一（もりい・ゆういち）

東京大学大学院総合文化研究科・准教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九六五年、群馬県
- ② 専門分野・地域……国際政治学、EU研究、ドイツ研究・ヨーロッパ、ドイツ
- ③ 学歴……上智大学外国語学部卒、東京大学大学院総合文化研究科国際関係論専攻修士課程修了、同博士課程中退
- ④ 職歴……琉球大学法文学部政策科学・国際関係論講師（二八歳、五年間）、筑波大学国際総合学類講師（三四歳、一年間）、東京大学大学院総合文化研究科准教授（三五歳）
- ⑤ 現地滞在経験……ドイツ（二二歳、二六歳、各一年間、留学生）
- ⑥ 研究方法……政策形成などの研究が中心なので資料調査、インタビューなどを行う。多くの場合、歴史にはなっていないかったり進行中の対象を扱うので、背景を理解した

メッセージ

作法も身につけ、心を込めて対象に接する

学部の頃「国際組織論」という国連を中心とした国際組織に関する講義を聞いて国際関係における国家の協力という問題に興味を持った。ちょうどヨーロッパで域内市場を完成させるプロジェクトが進んでいたので統合研究を始めたが、冷戦が終わってドイツが統一しEUが成立した。国際政治から入ったので今でも外交を中心としてEUとドイツの政治が接する部分を中心に研究しているが、グローバルな課題にEUやドイツがどう立ち向かっているかに興味を持っている。

地域研究者は対象地域を細部まで知り尽くし、その地域での空気感まで理解できるように心を込めて接する必要がある。しかし、同時に研究にあたってはその地域の何が普遍的であり、何が固有なのかについても議論できなければならぬ。それを可能にしてくれるのがデイスクリプションである。学問の方法、作法にもさまざまなレベルがあり、フォーマルな理論から描写的に因果を説明するものまできわめて多様だが、何らかの学問の作法を身につけていないと他地域の研究者や、しっかりしたデイスクリプションを持った研究者と対話が成り立たず、単におもしろいトリア情報をたくさん知っている地域マニアで終わってしまう。政治学や法学や経済学など伝統的なデイスクリプションとの対話を可能にす

り裏付けをとるために聞き取り調査を行っている。

- ⑦ 所属学会……日本EU学会、日本国際政治学会、日本ドイツ学会
- ⑧ 研究上の画期……ドイツ統一。どのような対象を研究したら良いか定まっていなかった大学院生の時に、漠然とした研究対象であったヨーロッパが急速に大きな変化を示し、それまで想像もできなかった展開が見られた。統一による社会の変化、EUの成立やより広い国際秩序の変化によって研究対象が大きく拡大した。

⑨ 推薦図書……遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』（名古屋大学出版会、二〇〇八年）

るためにも、既存の学問のお作法をひとつでもしっかり理解しておくことはとても重要である。

EU研究や現代のヨーロッパを研究することは、安全保障、政治協力、経済活動、文化交流などと直結している。グローバル化が進んだ現代の社会ではそれぞれの地域が孤立して存在することはなく、いつでも国際社会や他地域との関係性のなかで存在して、相互に関係を持っている。この関係性をどのようにマネージして安定した国際社会を構築できるかを研究することが現在の興味を中心となっている。もともと、ヨーロッパは距離的には遠いし、現地に駐在している外交官やビジネスマンには最新情報の入手という点ではかなわない。しかし研究者は長期的なパースペクティブや分析の手法によって対象を違った角度から説明したり、さらに分析に基づいて提言を行うことも可能である。

ヨーロッパ研究はEUの発展やグローバル化によって国や地域の仕組みも変化しているので非常に複雑になっている。一人の研究者にできることは限られている。だからこそ、対話可能な方法を使って隣接領域の研究者と関わりながら研究を進めなければならない。

個人的関心から社会へ

庄司克宏（しょうじ・かつひろ）

慶應義塾大学大学院法務研究科・教授（ジャン・モネ・チエ）



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五七年、和歌山県（熊野地方）
- ② 専門分野・地域……EU研究（とくにEU法）
- ③ 学歴……慶應義塾大学法学部法律学科、同政治学科、慶應義塾大学大学院法学研究科（政治学専攻）
- ④ 職歴……二松学舎大学国際政治経済学部専任講師、同助教授、横浜国立大学大学院国際社会科学研究所助教、同教授等を経て現職
- ⑤ 現地滞在経験……在ベルギー日本国大使館専門調査員、ケンブリッジ大学ヨーロッパ法センター客員研究員、ヨーロッパ大学院大学（フィレンツェ）客員研究員など
- ⑥ 研究方法……フィールド調査は現地感覚を持つ上できわめて重要。インタビュー使用。
- ⑦ 所属学会……日本EU学会、国際法学会、日本国際政治

学会など

- ⑧ 研究上の画期……冷戦の崩壊、九・一一同時多発テロ。EUの国際社会における地位に重大な変容を生じさせたため。
- ⑨ 推薦図書……Miguel Poires Maduro, *We The Court: The European Court of Justice and the European Economic Constitution*, Hart Publishing, Oxford and Portland Oregon, 1998.

メッセージ

EU研究の方法

慶應義塾大学法学部法律学科では民法を専攻したが、あまり関心を深めることができなかったため、政治学科に学士入学してヨーロッパ（とくにEU）研究を始め、そのときにはすでに研究者となることを決意していた。そもそもヨーロッパという先進地域になぜヒトラーのような怪物が登場したのかというのが中学生からの疑問であり、そのことがEU研究を始めた背景となっている。

方法的には、最初のデイシプリンが法律学ということもあり、ヨーロッパ統合における欧州司法裁判所の役割と限界というテーマで研究を行った。最初のうちは基本的な人権の保護、次いで域内市場における自由移動、最近では経済通貨同盟を研究対象としている。EU研究には自分の中核的なデイシプリンを持つことは不可欠であるが、そのうえで法律、政治、経済、社会等、複眼的にアプローチすることが必要である。その点で日本EU学会は法律・政治・経済等の研究者が参加しているため非常に有益である。

EUを研究するのは、複数の国家が統合する場合の先進事例として自分の知的関心を充足させるのが最大の動機であるが、そのことが日本の対EU関係について政策提言を行うことに結び付くことがあれば社会貢献となっていると思っている。

二〇〇九年から二〇一〇年にかけて外務省から「日EU関係の将来のための有識者委員会」（定員四人）の委員を依頼された。ワークショップを数回開催するとともに、ブリュッセルでは国際シンポジウムに講演者として参加する一方、一年かけて（EUの専門家として全体のとりまとめと編集を担当しながら、他の三人の委員とともに）提言書を作成し、二〇一一年四月一日に提出した。公開されていないので残念であるが、EUとの交渉ごとで非常に参照されているということを耳にしている。

自分がEU法を研究し始めた頃、日本にその研究者はほとんどおらず、大学院生については皆無であった。そのため、ほぼ独学でEU法を会得した。そのプロセスが自分には快感であった。EUは加盟国数が飛躍的に増加したため、ますます複雑な様相を帯びている。今後は法に限らず政治・経済等を含めて「横」の連携がいつそう必要になるものと思われる。EUのコミッション教育文化総局の財政的支援を得て慶應ジャン・モネ・EU研究センターを立ち上げて五年目になるが、原則として毎月最終土曜日に開催する慶應EU研究会（参加自由）を柱にマルチデイシプリナリーな研究活動を行っている。

専門化した学問を統合する

家田 修 (いえだ・おさむ)

北海道大学スラブ研究センター・教授



地域研究者の軌跡

① 生年・出身地……一九五三年、愛知県

② 専門分野・地域……東欧地域研究、とくにハンガリー地域

③ 学歴……東京大学経済学部(経済史専攻)、東京大学大学院経済学研究科(理論経済学・経済史専攻)

④ 職歴……大学助手(三二歳、四年半)

⑤ 現地滞在経験……ハンガリー(二四歳、二年半、留学生…三四歳、二年、研究員…三九歳、一年、地方都市の県庁付き研究員…四五歳、一年、研究員、ロシア(四四歳、半年、研修)

⑥ 研究方法……フィールド調査なしに論文はありえない。文献資料や文書資料もフィールドのなかで見つけ出したものが大きな意味を持つ。調査対象の中に入り込んで、

一緒に考え、働き、苦楽を共にすることから始める。

⑦ 所属学会……スラブ東欧学会、東欧史研究会、現地の社会学会、社会学会

⑧ 研究上の画期……東欧を選んだという意味では一九六〇年代の学生運動、社会主義圏への関心という意味では中国の文化大革命、地域研究という意味では一九八〇年代末の現地における個人農のフィールド調査

⑨ 推薦図書……バイブルのような地域研究書をあげるのは困難なので、問題提起の書としてこの数年間で新しい地域史を開拓した左近幸村編著『近代東北アジアの誕生』(北海道大学出版会、二〇〇九年)をあげておこう。

メッセージ

(地域) 研究者になること

地域研究者を意識し始めたのは、二年近くの農家実態調査(家族ぐるみで一緒に働いた)を行った経験、および文書館で大部の文書全体を読み通した経験が基になっている。現在の研究は地域環境問題、とりわけ昨年のハンガリーでの「赤泥事故」、および福島原発事故以後は環境汚染事故への社会的対応を研究テーマにしている。教育でも環境をテーマに講義と演習を開講している。

第I部「現場の悩み三〇問」を読んで

地域研究を「情報」で考えてみる。地域研究はディシプリンの応用といわれるが、ディシプリン分析に必要な情報を提供するの地域研究である。情報の要素を5W1Hとすると、抽象化を目指すディシプリンでは、5W1Hすべてをまとめて分析することはない。極端な場合「だれが何をした」だけで完結する。他方、地域研究ではいずれの要素が欠けても分析は成立しない。ディシプリン分析でも「だれが」と「何を」以外の3W1Hを考慮すれば地域研究になる。ジャーナリズムとは5W1Hを重んじる点で共通する。しかし地域研究が扱う情報は「ニュース≠非日常の出来事」ではなく、日常に関わるものである。日常にこそ問題点が潜んでいる。ニュースを日常性から説明できる能力が地域研究者に問われている。

地域研究の魅力と可能性

一九〜二〇世紀は専門知が求められた。人々は知的関心を絞りこみ、集中的・効率的に仕事をした。しかし高品質の製品が生み出される傍らで、廃棄物が環境を汚染した。「フクシマ」はその究極である。京大原子炉実験所の小出裕章さんや今中哲二さんたちは、「原発が安全なら、なぜ都会に作らないのか」という自然な問いかけを発し続けた。私の恩師が最近、某学会から退会した。「次回大会を予定していた福島大学を、あろうことか放射能汚染と余震の恐れを理由に忌避し」たことに憤慨し、「福島市民の心の傷に塩をすり込むような、信じられないこの唾棄すべき決定に抗議し」「このような決定を下した『精神のない専門人』(ヴェーバー)たちの学問にもはや信頼を寄せることはできない」からだと伝えてきた。奇しくも、小出さんが国会で国会議員に投げかけたガンジーの言葉、「理念なき政治、労働なき富、良心なき快楽、人格なき学識、道徳なき商業、人間性なき科学、献身なき信仰」にも同じ主張がある。

二一世紀は専門化した学問を統合する時代である。5W1Hの情報ばらばらに切り離すことなく、総合的に論じる時代である。人類が対立から共生へと精神を転換させている今、地域で人々と共に考えることから学問を始める地域研究にこそ大きな未来がある。

● 東欧・スラブ

曲がりくねった道

伊東孝之（いとう・たかゆき）

早稲田大学政治経済学術院・大学院政治学研究所

地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九四一年、三重県
- ② 専門分野・地域……比較政治学・ポーランド
- ③ 学歴……東京大学教養学部国際関係論分科・東京大学大学院社会学研究科国際関係論専攻
- ④ 職歴……一九七二年一〇月北海道大学法学部助教、七三年九月同付属スラブ研究施設助教、七八年四月同スラブ研究センター教授、九三年四月早稲田大学政治経済学部教授
- ⑤ 現地滞在経験……ドイツ（二六〜三〇歳、四年間、留学生）、ポーランド（二七歳、一ヶ月、留学生）、ポーランド（二九歳、三ヶ月、留学生）、ソ連（モスクワ、キエフ、トビリシ、エレバン、バクー、ヴィルニユス、リガ、タリン、三六〜三七歳、一〇ヶ月、交換研究員）、ドイツ（四一〜四二歳、

一年間、客員講師）、スイス（六〇歳、六ヶ月、客員講師）、ポーランド（六〇歳、六ヶ月、交換研究員）、ロシア（モスクワ、六一歳、六ヶ月、交換研究員）、その他東欧各国に十数回科研費などで現地調査

⑥ 研究方法……フィールド経験は重要。インタビュー、参与観察など。対象国が社会主義国であったため、必ずしも自由取材は許されなかった。ただし、開発途上国とは違って、社会科学の研究水準が非常に高い国であったので、現地の研究者と交流したり、日本では必ずしも入手できない研究文献を渉猟したりすることが重要だった。また、長期に住み込み、とくに目的もなく学生、隣人としてつきあったり、新聞、テレビを見たり、地方に旅行したりすることがきわめて貴重であった。

⑦ 所属学会……日本政治学会、日本国際政治学会、日本比

較政治学会、日本ロシア・東欧学会、日本平和学会

⑧ 研究上の画期……ポーランド「連帯」運動

⑨ 推薦図書……Gerardo L. Munck & Richard Snyder, *Passion, Craft, and Method in Comparative Politics* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 2007).

メッセージ

もともとの専門は国際関係論だった。高校時代は外交官になるつもりだった。大学に入ってまもなく外交官はつまらないと思うようになったが、さればとって何になってよいか分からない。それを考えるために四年生のときに留学することにしたが、それでも決まらなかったために大学院に入った。典型的なモラトリアム進学だった。

理論を選ばなければというよりも、地域を選ばなければという意識が先に立ったのは、当時国際関係論は地域研究であるという理解が主流であったことによるものだろう。私のすぐあとに入ってきた学年あたりから理論志向の学生が増えてきたし、そういう学生は米国に留学すると立派な理論屋になって戻ってきた。

地域については、スペイン、中国、ドイツ、ロシアと迷って、最後に東欧に落ち着いた。「落ち着いた」といっても、さしあたりは抱負として落ち着いたのであって、研究者としてはずっと先であった。地域研究者となるためにはまず

語学を身につけなければならない。これが難題だった。使物になるまでに数年はかかる。資料もなかった。

自分の心は分裂していた。一方では外交史に関心があった。東欧への関心は大国の外交政策の対象として芽生えたものであるような気がする。他方では、社会思想において普遍主義の主張と特殊性への配慮がどのように接合されるかという関心があった。この関連でマルクス主義者の民族問題論を研究しようと思い、ドイツ語、ポーランド語、ロシア語の関連文献を読みあさった。

語学的にはドイツ研究者、ロシア研究者になることもできたが、その分野ではすでに大勢の先輩や同輩がいて、競争が激しそうだった。競争の少ない国をやりたいという功利主義的な動機が働いたのかも知れない。留学先にドイツを選んだことも大きく影響していた。ドイツでは、アメリカのように研究のクエスチョン、デザイン、メソッドについて細かい指導がほとんどなく、事実上自由放任だった。ドイツからしばしばポーランドに調査に出かけたが、そのうちにポーランドの歴史、社会、政治の魅力に取り憑かれてしまった。しばらくのちにポーランドに『連帯』運動、民主化という大きな政治変動が起きて、自分の選択を決定的なものとした。

現在の勤務先に移ってからは専ら比較政治学を講義し、主として民主化問題を取りあげている。自分の関心は東欧にあるが、それを学生に押しつけないように心がけている。



交じりあうフィールドから

中村安秀（なかむら・やすひで）

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻国際協力学・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五二年、和歌山県
- ② 専門分野・地域……国際保健、インドネシア
- ③ 学歴……東京大学医学部医学科
- ④ 職歴……都立病院小児科（二五歳、一〇年）、インドネシア国際協力機構専門家（三五歳、二年）、パキスタン国連難民高等弁務官事務所（三八歳、一年）、大学病院講師（四一歳、三年）、ハーバード大学公衆衛生大学院（四五歳、一年）、大学教授（四七歳、一二年）
- ⑤ 現地滞在経験……インドネシア、パキスタン、ボストン（アメリカ合衆国）
- ⑥ 研究方法……フィールドでの生活は何ものにも変えがたい貴重な経験でした。文化、風土、人々、食事。土地の匂いそのものから多くのことを学ばせてもらいました。

- ⑦ 所属学会……日本国際保健医療学会、国際ボランティア学会、日本渡航医学会、国際開発学会など
- ⑧ 研究上の画期……阪神・淡路大震災。避難所の様子は難民キャンプのようでした。日本が第三世界になった現実を目撃したことは大きな衝撃でした。
- ⑨ 推薦図書……青山潤『アフリカによる旅』（講談社文庫、二〇〇九年）。謎の熱帯ウナギ捕獲という一点を突破口にしてアフリカの奥地に迫った理系の研究者。単なる冒険譚の域を越えて地域の姿を描き出している。

メッセージ

地域研究の枠組みに拘泥する必要はまったくないと思う。私自身でいえば、自分の研究が国際保健なのか、国際協力学なのか、地域研究なのか、答えはない。国境もボーダレスとなり、学問分野もボーダレスになっている。伝統的な学問分野の壁の内か外に気兼ねするのではなく、自分は何を研究したいのかという重要な点にこだわればいい。自分が好きだと思えば、自分が選ぼうとしている道に果敢にチャレンジしてほしい。

地域研究者とNGOとの関係を考えてみたい。畢竟、理論を研究する者と実践をめざす者は、同じ事象を見ていても感性も思考回路も導きだす結論も異なるのは当然である。学際研究では、「呉越同舟アプローチ」と呼んでいた。国際保健では、医師や看護師といった狭義の保健医療関係者だけでは人々の健康は守れないことが共通理解になりつつある。地域研究者と共同研究したいという実践者は少なくない。

一方、地域研究者には、実践を伴う研究のあり方にとまどいがあるようにみえる。戦争に利用された過去のトラウマが残っているという理由からかどうか、私にはわからない。もちろん、状況によっては、地域研究の成果を性急に実践に適用することは是非について慎重になることは当然である。しかし、国連機関に人類学の専門家が勤務し、N

GOにビジネススクール出身者が関与し、国際保健プロジェクトのリーダーに非医療者が就任する時代である。異なる専門家と交じりあい議論すること、実践者とフィールドを歩き学びあうこと、研究成果を仲間内だけでなく社会に発信することには、大きな異論はないであろう。交じりあうフィールド調査から新しい地域研究の地平が切り拓かれることを期待したい。

最後に、「研究対象社会の開発に関わると研究ではなくなる」という誤った神話について発言したい。東日本大震災では、震災前から被災地に関する研究を行っていた自然・人文科学の研究者は少なくなかった。彼らの多くは、震災後も、防災、農業、教育、文化、保健医療、高齢者、子どもといった多岐にわたる分野で復興に関わりながら、自分の研究を継続している。日本国内では当然のことが、なぜ、途上国になると研究者のスタンスが変貌してしまうのだろうか。開発に関わらなくても研究は遂行できる。まったく同様に、開発に関わっても研究は成立する。社会に対する研究者の姿勢と研究内容の質が問われているだけである。

自分ならではの新領域を拓く

井上 真(いのうえ・まこと)

東京大学大学院農学生命科学研究科・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九六〇年、山梨県
- ② 専門分野・地域……カリマンタン地域研究、森林社会学、ガバナンス論
- ③ 学歴……東京大学農学部(林学科)
- ④ 職歴……国立林業試験場の研究員(三三歳、四年間)、インドネシア教育文化省熱帯降雨林研究センターの研究員(二六歳、三年間)、森林総合研究所の研究員(二九歳、一年間)、東京大学農学部の助手(三〇歳、五年間)、東京大学農学部の助教(三三歳、九年間)、東京大学大学院の教授(四四歳、八年目)
- ⑤ 現地滞在経験……長期滞在はインドネシア・東カリマンタン(二六歳、三年間、JICA長期派遣専門家)のみ
- ⑥ 研究方法……フィールドでの滞在期間が限られているのが痛いところではあるが、私自身の研究はフィールドで始ま

メッセージ

(地域) 研究者になること

私は学部卒で林業試験場の研究員になった当初から、熱帯林消失の原因を探る研究をしたかった。そして、運良くカリマンタンで三年間のフィールドワークを実施することができた。林学という実学出身であり、しかも学部卒だったので、研究方法には無頓着だった。最初から関連する諸分野の学問を活用しつつ、自分なりの世界を創ることを心がけた。カリマンタンでの三年間のフィールドワークを終えて博士論文を仕上げた頃に、自分のやったことが地域研究に含まれるという自覚を持つようになった。それ以来、学生たちにも総合格闘技のメタファーを用いて、「手法が先にあるべき」の研究を排し、最初から「本格的な地域研究」を目指すことの意義と考え方を説いてきた。

第1部「現場の悩み三〇問」を読んで

06 「就職するまではディシプリン型、就職してから本格的な地域研究？」に関連し、大学教員が注意すべき点があるのではないかと。私自身も「本格的な地域研究」を学生に勧めているが、ディシプリン重視の学会誌に論文を投函することもある。これは、独自の立ち位置を「重心」とする「本格的な地域研究」の領域(円/土俵)を自分なりに創成しつつも、その一部が複数の既存学問分野(円/土俵)

りフィールドで終わるものだと思う。フィールドでは、参与観察、インタビュー、調査票調査、グループ・ディスカッションなど何でも活用する。

⑦ 所属学会……日本森林学会、熱帯生態学会、環境社会学会、環境経済・政策学会、国際開発学会、ほか

⑧ 研究上の画期……一九九二年にブラジルのリオで開催された「国連地球サミット」。この会議以降は、小さなひとつの地域の実態に基づく政策提言を、生物多様性条約や気候変動枠組み条約の場にインプットする可能性が開かれた。つまり、地域研究の成果を国際条約の形成過程に活かし、「地域」を阻害しがちな「国家」を上下から挟み込む戦略を夢見ることが可能となった。

⑨ 推薦図書……高谷好一『多文明世界の構図——超近代の基本的論理を考える』(中公新書、一九九七年)

と重なっているからである。そのような既存学問分野の手法を学び論文を投稿することは、他流試合として腕を磨くことになり「本格的な地域研究」を展開するうえで有効に作用する。そればかりでなく、論文という成果を産出することは、プロの研究・教育者を目指す学生にとっては現実的な重要性を持つ。博士論文が投稿論文三編分の内容を持つものだとするならば、三編ともディシプリン重視の学会誌に投稿してもよいし、三編ともディシプリン重視の学会誌に投稿してもよいはずである。重要なのは、既存分野の枠内(土俵内)に研究全体の「重心」を置くのではなく、独自の「重心」を構想し創成する意志を持つことなのである。蛇足ではあるが、新領域の創成を目指して果敢に挑戦すべきなのは、身分がすでに確保されているという点でいうと、むしろ大学教員である点を忘れてはいけないだろう。

地域研究の魅力と可能性

フィールドにどっぷり浸かりつつも、世界の動向にアンテナを張り、マクロな状況のなかに自分のフィールドを位置づけ、「地域おたく」や「趣味的研究」といった揶揄に對し自分なりの回答を見いだせば、自信をもって地域研究に取り組むことができよう。自分ならではの新領域を拓く地域研究は、アカデミズムと実践との架け橋という意味でも、わくわくするほど面白く、また刺激的なのである。